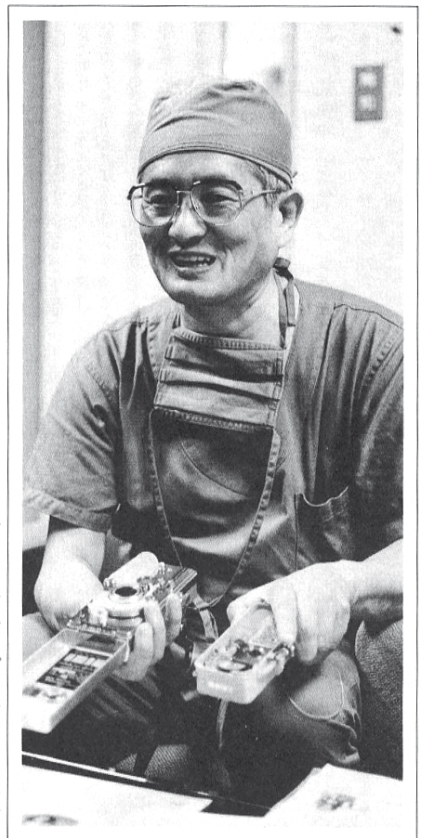


● 医の最前線 ●

肝臓がん・膵臓がん

● 動注化学療法の
先駆者

埋め込み式動注ポンプの説明をする三浦院長

手術の予定がびつしり

「いやあ、おまたせしてすみません」

三浦健院長は、手術着姿のまま、部屋に飛び込んできた。

東武東上線・みずほ台駅からタクシーで6〜7分。まだ緑の残る地に、この4月に開院したばかりの三浦病院の院長。

毎日、午前中は診察で午後は肝臓がんや膵臓がんの手術の予定が1日のあきもなくびつしり詰まっている。

取材で訪れたこの日も、肝臓がん患者の手術があり、それを終えて休む間もないインタビューだった。

ドクター・三浦の名前は「動注化学療法」の第一人者として著名だ。

肝臓がんも手術で切除できるものは治りがよい。しかし、残念ながら、日本人の肝臓がんには切除不能のケースが非常に多い。なぜなら、日本人の場合、肝硬変から肝臓がんに至るケースが9割にもほり、これが手術を難しくしている。

肝臓は7割を切り取っても時間がたてば再生してくる強い臓器だが、肝臓が軽

石のように固くなってしまふ肝硬変があったらそれは早めるだけのことだ。ば、それは死を早めるだけのことだ。

外科的治療ができないうちは、抗がん剤による化学療法が考えられるが、静脈からの点滴などによる全身投与では、肝臓に抗がん剤が届いた時点で、薄められてしまふし、肝臓自体に解毒作用があり、思ふような効果が期待できない。といつて、投与量を増やせば、髪の毛が抜けたり白血球が減少するなど、強い副作用で体のほうがまいってしまう。

そこで有効なのが動注化学療法というわけだ。肝臓がんの場合、肝動脈にカテーテルをつなぎ、体内に埋め込んだポンプから直接抗がん剤を注入してやる。

「こうすれば、静脈から全身投与した場合と比べて局所濃度は100倍くらい濃くなる。それでいて副作用は非常に少なくて済みます」(三浦院長)

三浦院長は、東大医学部を卒業した後、本本誠二教授の外科教室に入局し、38年1月から40年9月まで、フルブライト留学生としてポストンのレイヒョー・クリニ

ックに留学した。

ここで師事したワトキンス博士が抗がん剤持続注入ポンプの開発を進めており、三浦院長はその研究に協力、改良に改良を重ねて、ついに臨床に使えるポータブル型のポンプを完成させたのだ。

40年にポータブルポンプを持って帰国した三浦院長は、東大第2外科で生後11カ月の女兒の肝臓がん治療に使い、完治させた。以後、肝臓がん以外にも膵臓がんや大腸がん、脳腫瘍、上顎がんなど他のがん治療にも積極的に使用し、延命効果を上げてきた。

切除不能ながんに威力発揮

当初のポータブル型ポンプは時計仕掛けで、ネジを巻いておくとローターが1時間で1回転し、0・2ccの抗がん剤を動脈に送り込む。1日だと24回転して5cc送り込む。薬は25cc入るので、満タンにしておくと5日間もち、寝ている間も抗がん剤が肝臓だけに集中して入っていくので、がんを徹底的に叩く。

「抗がん剤は5-FUとマイトマイシン。

三浦病院院長
三浦 健 医博

タンクには5-FUを詰めておく。この薬はじっくり時間をかけて投与するとDNAの合成をブロックし、核酸の合成を抑制して細胞分裂を抑える。がんを兵糧ぜめにする薬なんです。マイトマイシンのように濃度依存性の強い薬は横から火炎放射器のようにワンショットでぶっ放すほうがいい。この併用で効果がかなり増します」(三浦院長)

このタイプのポンプは体外に取りつけるものだったが、1980年ころ、アメリカの宇宙開発産業が体内埋め込み式の動注ポンプを作った。動力源はネジ巻式のゼンマイとか電池でなく人間の体温を使った極めてユニークなものだ。

ポンプのなかは2層のタンクになっていて、底のほうには摂氏37度が沸点の特殊なフレオングスの液体が入っている。体温で温められたフレオンが気化して容積が膨張すると、蛇腹のタンクを押し上げ、上のタンク内の5-FUが動脈のなかに注入されるという仕組み。

「タンクの容量は50ccですから、10日たったら、皮膚の上からタンクの中に針を突き刺して抗がん剤を満タンにしてやる。そうすると下のタンクのフレオングスは圧縮されて再び液状になり、半永久的に使えるわけです」(三浦院長)

延命して国家的仕事を遂行

元駐米大使の牛場信彦氏もこの埋め込み式動注ポンプの世話になった一人だった。

対外経済相、日米賢人会議議長を務めた牛場信彦氏は59年の大晦日に亡くなっ

たが、実はその3年前に進行性の直腸がんの切除手術を受け、人工肛門を取りつけていた。その後も精力的に仕事をこなしていたが、手術を受けて1年半を過ぎ、肝臓転移が発見された。余命2、3カ月の診断。再手術は見合わされた。

当時半蔵門病院の外科部長をしていた三浦院長のところに、牛場氏から何とか手術してほしいとの依頼がきたのはそういう時期だった。自らがんと知っていた牛場氏は、「私には日米賢人会議議長の任期が1年残っている。あと1年仕事をし、て答申をまとめなくてはならないんだ」と言う。

三浦院長が牛場氏に埋め込み式動注療法の手術を行ったのは58年5月26日。牛場氏の肝機能検査の数値はみるみるうちに好ましい数字を出し始めた。その手術の1ヵ月後、NHKテレビニュースの画面に、ホワイトハウスでレーガン大統領と並んだ牛場氏の姿を見た三浦院長は、しみじみと医師としての喜びをかみしめた。

結局、牛場氏はその後1年7ヵ月の間、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパと6回も海外へ出かけ、国家の重要な仕事をなし遂げたうえで永遠の眠りについた。

牛場氏にも使われたこのポンプは肝臓がんのみでなく、切除不能な膵臓がんにも威力を発揮している。

さらに、こうした動注化学療法に温熱療法や放射線療法、冷凍療法を加味した集学的治療法を行うことによって延命率はずっと向上した。

特に、温熱療法はがん組織が熱に弱いことを利用したもの。三浦院長は家庭用の電子レンジと同じ、2450メガヘルツ極短波で肝臓がん、あるいは膵臓がんの局所加温を行ってがん組織を弱らせ、動注化学療法の成績を上げている。

延命効果だけではない。温熱療法と動注化学療法の併用で、7センチもあつたがんが2センチに縮小して石灰化して治った人や、膵臓がんの肝臓への転移で手術できない患者が、やはり温熱と動注化学療法の結果、3年目にがんが消え、13年2ヵ月経過していまも元気に暮らしている。

「いったん医者がサジを投げた患者さんでも、動注化学療法で何年も生きられている。決してあきらめてはいけなさと肝に命じています」

三浦院長の忙しい日々は終わりのないマラソンランナーのようだ。



三浦 健

(みうら けん)

昭和5年広島県呉市生まれ。29年東大医学部卒。ボストンのレイヒー・クリニックでワトキンス博士と協力して肝動脈に持続的に抗がん剤を注入するポータブルの体外ポンプを開発。帰国後、東大医学部第2外科でこの動注化学療法に磨きをかける。50年から半蔵門病院の外科部長。この4月に、埼玉県富士見市に三浦病院を設立。院長として陣頭指揮をとりながら、がん治療に取り組んでいる。医学博士。

